

1950年代における野外活動の傾向に関する研究

○中村 正雄 (東横学園女子短期大学)

キーワード：野外活動 教育キャンプ 学校キャンプ

○はじめに

文部省は、1955 (昭和30) 年より青少年教育キャンプ事業の積極的指導に乗り出し、翌1956 (昭和31) 年には『教育キャンプ指導の手引き』を発行した。この背景には、いわゆる「キャンプの商業化」により、教育キャンプの指針の必要が生じたことがあると考えられる。本研究では、この手引きが発行された1950年代のキャンプをはじめとする野外活動の傾向について概観し、今日における野外活動への影響について検討した。

○学校教育における野外活動

1950年代前半は「夏期(夏季)集落」という語が用いられていた。当初、夏期集落は学業に支障をきたす心配の少ない夏期休暇に虚弱児を海浜、林間、高原に集めて、十分に養護、治療し、体力の回復を図る施設としてとらえられていた。その後、キャンプをはじめとする野外活動に内在する固有の教育的価値に関心が集まり、不規則で無計画になりがちな夏期休暇を有効に過ごす一手段として、健全児をも対象とする「臨海学校」「林間学校」

「高原生活」「キャンプ」等々の野外活動が、各学校の夏期の校外行事として実施されるようになった。これらの行事の主たる目的は集団生活訓練に関わるものが多く、規則正しい生活や身体的諸活動による生活指導や体育に重点を置いていたと言われている。しかし、このような校外行事を実施する上で、学校単位で利用できる施設が少なく、また、経済的な理由から全校参加というよりは希望者を募って実施するケースが多かった。

1950年代後半に入ると更に多くの野外活動が実施されるようになったが、それに伴い、野外活動時の事故も増加していった。1955年 7月、三重県橋北中学校の女生徒36名が津市中河原海岸で水泳の練習中に溺死するといった痛ましい事故が発生した。また、1956年の日本隊マナスル登頂は、折りからの登山ブームに拍車をかけた。登山者の増加とともに山の遭難事故も多くなり、特に高校生山岳部員が遭難事故の40%を占めるようになったことは大きな問題であった。

○『教育キャンプ指導の手引き』

昭和31年発行の『教育キャンプ指導の手引き』では、その前文において「キャンプが、ともすれば健全な余暇の善用の範囲を逸脱して、青少年に無軌道と放縦の生活に感染する機会となり勝ちであることは、近時の商業キャンプのかもしれない事態と考え併せて、識者の深く憂うところである」とし、教育キャンプの指針の必要を強調している。この手引きにおいて「キャンプ」ではなく、あえて「教育キャンプ」と称したのは、「キャンプは教育活動ではない」という風潮が少なからずあったということによると考えられる。

手引きの内容は、Ⅰ. 教育キャンプの意義と沿革、Ⅱ. 教育キャンプの指導者、Ⅲ. 教育キャンプの計画と準備、Ⅳ. 教育キャンプの組織と管理、Ⅴ. 教育キャンプの設営と生活、Ⅵ. 教育キャンプの諸活動の指導上の留意点、Ⅶ. 教育キャンプの保健衛生、Ⅷ. 教育キャンプの評価、であり、同年に発行された『教育キャンプ手帳』を多く引用している。

また、教育キャンプの諸活動として「テントの取扱い」「キャンプ工作」「自然研究」「ゲーム、スポーツ」「歌」「キャンプファイヤー」、について言及し、参考資料として「ボーイスカウトのキャンプ」を紹介している。

手引きの執筆者の多くは、YMCA、YWCA、ボーイスカウト等の民間団体において青少年の教育に携わるキャンプ指導者であった。この時期における教育キャンプ運動は、主にこれらの民間青少年教育団体によって展開されていたと言われている。

○「教育キャンプ」と「学校キャンプ」

『教育キャンプ指導の手引き』において「教育キャンプ」と称した背景に、もうひとつ、「学校キャンプ」を包括する概念として「教育キャンプ」をとらえていたことがあったと考えられる。手引きでは、教育キャンプと学校キャンプについて「諸学校で行う、いわゆる『学校キャンプ』は、いうまでもなく、教育キャンプの一種ではあるが、『学校キャンプ』即ち、『教育キャンプ』ではない。教育キャンプには、学校以外にも広い分野、即ち、青少年団体、諸施設、及び市町村などの地域社会が中心となって行うキャンプをも含んでいる。」(I. 教育キャンプの意義と沿革)と述べ、学校教育におけるキャンプ、すなわち「学校キャンプ」と、社会教育におけるキャンプ、すなわち学校期の児童・生徒のみならず、学校卒業後の勤労青少年をも対象としたキャンプをあわせて「教育キャンプ」としてとらえている。

○「教育キャンプ」の問題点

『教育キャンプ指導の手引き』では「現代キャンプの諸問題」として、(1)指導者の不足、(2)キャンプ適地の不足、(3)キャンプ基準設定の必要、(4)勤労青少年の余暇、経済力の不足、を指摘している。「指導者の不足」については、キャンプ指導者の絶対数不足、キャンプ指導者の必要条件のひとつとしてのキャンパー体験を持つ指導者の不足を指摘している。「キャンプ適地の不足」については、教育キャンプの諸条件を満たすキャンプ場の商業化を由しき問題としてとらえている。また、「キャンプ基準設定の必要」については、健全な教育キャンプの実現のために是非ともキャンプ基準が必要であるとし、キャンプ指導者団体の育成の必要もあわせて指摘している。さらに「勤労青少年の余暇、経済力の不足」については、教育キャンプの恩恵を最も多く必要としているのは勤労青少年であるにもかかわらず、彼らにキャンプに参加する余暇がないこと、経済的な負担が限られていることを指摘し、このことが教育キャンプ普及の障害になっていると述べている。

○おわりに

1950年代の学校教育における野外活動は、主な目的を集団生活訓練に置き、夏期における有効適切な教育方法のひとつとしてとらえられるようになったが、生活訓練的、体育的野外活動への偏向も指摘されている。また、『教育キャンプ指導の手引き』は「キャンプ無軌道期」における教育キャンプの指針として有効であったといえるが、その後のキャンプをはじめとする野外活動のいわゆる「定型化」をもたらしたと考えることもできる。

キャンプをはじめとする野外活動は、教育的見地から見れば、自然の中で行われる様々な活動を通して様々な教育効果を期待することが可能であり、本来的には学際性、多様性を持つものである。40年程経た今日、野外活動に課せられた時代的・社会的要請を踏まえつつ、その意義や内容、方法について再検討する必要があると考えられる。